

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)
大学院学生研究
2016 年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学	研究科	超域文化学	専攻
研究代表者 (2017年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	立教大学大学院文学研究科超域文化学専攻博士課程前期課程1年		上月 理愛 印		
指導教員	所属・職名		氏名		
	立教大学大学院文学研究科超域文化学専攻教授		栗田 和明 印		
自然・人文・社会の別	自然	・ 人文	・ 社会	個人・共同の別	個人 ・ 共同 名
研究課題	インド・ケララ州の2村の比較から見たダリットの人々に対する教育効果				
研究組織 (研究代表者・共同研究者) ※2017年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	立教大学大学院文学研究科超域文化学専攻博士課程前期課程1年		上月 理愛		
研究期間	2016 年度				
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 199,750 円 / (採択金額) 200,000 円				

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

インドケララ州のパタナムティッタ県における2村のダリット村での学力格差が存在することを想定し、その現状のデータを集め、その要因を探ることでダリットにとってどんな文化的・経済的背景が教育へと結びつき、またその後教育を受けたことによって社会的ステップアップが図れるのかについて探る。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ 教育格差 } { インド } { 不可触民 }

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

夏の研究調査では SFR の研究助成金を受け、2016 年 8 月 18 日から 9 月 30 日までの 44 日間、調査地であるケララ州コーランチェリー市プナカドゥに滞在し、カースト制度の中で最下層とされる不可触賤民「ダリット」と(自称・他称を問わず)呼ばれる人々の家族構成や教育の達成率について調査を試みた。インドのケララ州はインド国内に置いては唯一州民皆識字を達成し、州全体に公共による福祉や医療制度、教育が行き届いている。インドの社会にはカースト制度に基づく序列意識が浸透しており、憲法上ではカーストを理由にした差別は禁止されているが現実にそうした行為や意識が罰されることはない。現在、ケララ州ではダリットであるとか低位のカーストであることで教育が受けられないということは無いとされている。教育を通じて知見を得ることはダリットの人々も可能である。しかし、そのような教育を受けた後、ダリットの人々は学びの場を抜けだして社会に飛び込み、その構成員となるわけだが、そこでのダリットの人々はどんな役割を要求され、または担うのだろうか。ケララ州では(少なくとも統計上は)誰しにも教育の機会が開かれていることになっているが、教育によって得られた学習が、その後に及ぼす影響はカーストによって違ってくるのだろうか。ダリットの人々にとって教育は何を意味するのか。それを解明する手がかりを得るために、夏の調査では、調査票を用意し、対象集落に居住するダリットの宗教、名前、性別、続柄、年齢、最終学歴、職業、出身村、自宅でのトイレ所有の有無についてデータの収集を行った。

同調査で回収できた調査票は 26 世帯、148 名分になった。しかし、ちょうど調査開始時に対象集落内から非合法酒の取り引きに関して逮捕者が出てしまい、私自身が対象集落に頻繁に出向くことは安全上の理由から断念することとなった。そのため調査は、村のそと、街や協会といった外部の施設で出会える数人のダリットから、その者が知る限りの住民の情報を得るという形で行った。結果から言えば、対象集落には 6 回行くことができたのみで、いずれも短い時間(30 分~2 時間ほど)しか滞在できなかった。調査票のデータはほとんどが集落外での聞き取りによって賄われた。また対象集落出身のダリットのみからの情報収集に限界があったため、予定を変更して「ダリットの世帯調査」という名目にし、街で偶然出会うことができた対象集落出身以外のダリットからも世帯情報を収集した。

まず回収できた調査票の年齢区分は 5~27 歳が 27 名、28~54 歳が 53 名、55~90 歳が 26 名となった。さらに詳しく述べると、10 代が 20 名、20 代が 8 名、30 代が 22 名、40 代が 22 名、50 代が 16 名、60 代が 12 名、70 代が 4 名、80 代と 90 代が 1 名ずつとなった。20 代が極端に少ないが、これは平日の昼間に集落を訪問することが多かったため、働き盛りの 20 代に接触することができなかつたのではないかと考えている。ケララ州では初婚年齢がインド国内と比べれば極端に遅く、女性の初産年齢も遅めである。幼稚園児ほどの子供を育てている女性は 30 歳近いことが多い。20 代前半であれば、まだ学校に通っている者も多く、勉学に勤しんでいるため日々の生活は忙しい。また 20 代後半であれば働き盛りのため特に男性は賃金を稼ぐことに躍起になっているという印象がある。20 代のデータは今後の調査活動で補填する予定である。

調査内容を分析すると、55~90 歳では未就学者が 26 名中 18 名で、半数以上であるのに対し、28~54 歳では 53 名中の未就学者は 7 名となっていた。明らかに世代を経るに連れ、未就学者は減っていることがわかった。また、High school と呼ばれる日本の高等学校に相当する学校を卒業したのは 28~54 歳の中の 36 名であり、半数以上が高等教育を受けていたことが判明した。5~27 歳になるとほとんどが在学者なのではっきりと断言はできないが、それまでの世代で現れなかつた大学進学者が、29 名中 6 名も存在し、ダリットも徐々に高学歴化していることがわかる。High school のさらに上となる進学先として、大学進学一步手前となる学校 Plus2 に通う学生も 9 名居り、今後の世代の大学進学率はさらに上がるかと思われる。さらに、男女別のデータを比較すると、男性 56 名、女性 78 名の内、高等教育進学者である 6 名中 5 名が女性である。男女比を考慮しても圧倒的に女性の方が高等教育における進学率が高いことが判明した。しかし一方で未就学者は男性 6 名、女性 18 名であり、女性の比率の方が高い。これは 55~90 歳の世代においての女性に対する不平等な扱いが原因かと思われる。だが、すると現代ではなぜ女性の進学率が上がっているのかという問題に行き着く。今回の調査では、この辺りの疑問点を解明するためのさらなる調査を行う予定である。

また、調査票では各人の職業についても調査を行った。その結果、ダリットの人々は主に男性ならば「日雇い労働者」(職業斡旋場や仲介人を通じてあらゆる労働に勤務する、いわば雑役のような労働形態。もちろん雇用契約などは無く、その日の労働をするとその日の分の給料が支払われるなど日雇いであることが多いが、それも雇用主との口頭での相談による。)、女性ならば「ハウスメイド」(高所得者の家での家事労働。短期間の場合もあれば、週に 2 度の勤務を 1 年間などの長期間で雇われることもある。いずれにせよ勤務状況は雇用主に依存しており、安定的な労働環境は保障されていない。)が最も多い就労形態であり、前述した High school や Plus2 といった高等教育を受けている人々もこの 2 つの職業に就いている場合が多い。いわゆる雇用契約の無い状態であり雇用主の状況に依存している職業に就いている者は、労働者 86 名中 39 名である。雇用主に依存していない職業であれば画家やリキシャ(三輪のタクシーのようなもの)運転手など自営業者が居るが、画家は作品 1 つ当たりの売価は安く、運転手はお客が捕まらない日は稼ぐことができないなど不安定には変わりはない。

研究成果の概要 つづき

夏の世帯調査の結果から言えることは、ダリットの人々にとって、教育は高レベルになっても職業の安定性に結びつきづらかったということである。しかし、あくまでもそれは今まではそうであったという話であり、いわゆる学士・修士レベルの教育を達成するダリットが近年になって増えているということは注目に値する。今までと今後ではダリットにとっての教育の意味合いは変わってくるのではないかと考えられる。

夏期調査の後には文献調査や統計資料の整理を行った。10年に1度行われるインド国税調査によると、ケララ州の識字率は年々上昇しているため、徐々に教育が進展していったと言えるだろう。さらに顕著な特徴に思えたダリットの高学歴者が女性に偏っている点だが、センサスを見るとケララ州の学士・修士進学者は男性よりも女性の方が高い。インド全体での統計結果では男性の進学者のほうが女性を上回っているため、この特徴はケララ州全体の特徴であると言える。センサスの結果を見るとダリットとそれ以外の人々の識字率や進学程度も同うことができる。これを参照すると1961年の時点ではダリットの識字率はその他カーストと比べて値が低い、つまり教育を受けられず識字ができない者が多かったということだが、時代を経る毎にその差は縮まり、最新の2011年の調査ではほとんど差は無い。(わずかにダリットが低い)これはインド全体で最低限の識字教育が普及していったことを示しているが、しかし同時にインド経済も近代化し、就業形態も変化したので社会における教育の意味合いが変化していったことも事実であるため、ダリットに識字教育が普及したことがそのままダリットの被差別待遇を解消したということにはならないだろう。

次に、春期の現地調査では、実際の教育を受けたダリットはどのような職業に就く機会を得られるのかについて聞き取りを行った。対象者は夏期の調査時に確認できた高等教育進学者6名のうちから、学士・修士レベルに在籍するダリット3人、技術学校へと進学したダリットとOBC (Other Backward Classes: ダリットではないが低位カースト)の2人である。まず学士・修士レベルの在籍生であったダリット3人は全員女性であった。その内協力者AとBは姉妹であった。彼女らは土地無しで流浪に暮らしていた核家族のダリットである。父は義務教育を3年で中退しており、母も小学校を卒業したのみという学歴であった。定住できずに流浪していたときに私の調査協力もしてくれている現地NGOの手によって住居が提供され、現在もそこで暮らしている。姉妹はとても意欲的に勉強に励んでおり、また本人たちも勉強が性に合っていると思っていたこともあり、学士レベルの大学まで進学した。2人とも専攻は商学であり、何故その専攻にしたのかと聞くと「数学が自分に合っているから。また銀行員や会計士になれるから。」と語っていた。なぜ銀行員や会計士になりたいのかと聞くと、安定性の高い職であるからと語ってくれた。協力者Cは当初予定していた対象集落到に住むダリットである。Cには姉がいるが学士・修士レベルには進学しておらず、また就職もしていない。ストレス障害のために就業ができないのだという。そして父はかつて大工として働いていたが、仕事現場での事故で膝下から下の右足を失っており、現在は宝クジ売りをしている。母は家計を支えるために精力的に働いている。Cの専攻は経済学である。本人は将来銀行職に就きたいと考えているが、母は警察になってほしいと考えている。

以上の3人に聞く限り、進学後の進路について見通しが無いというような口調は見られなかった。銀行員になるには優秀な成績が必要であったり、会計士になるには国家試験を合格しなければならないが、本人たちに「それが可能だと思うか？」と聞くと「可能である」と自信を持って答えていた。また学校での交友関係について聞くと男女問わず友好的な関係を築いていると答えていた。はっきり言って私自身の想定では、ダリット出身であるということでも明らかな差別を受けるのではないかと考えていたが、(例えば就職の際に出自を理由に断られる、友人関係が築けないなど)そうしたあからさまな差別的態度というものに苦悩しているというような話は、少なくとも今回の聞き取り調査からは得られなかった。このようなダリット出身の高学歴者たちは、自身がダリットであるということについての差別的処遇について悩んでいるという言動は、少なくとも春期の調査からは見られなかった。変わりに「何か勉強を続ける上で(勉強以外で)精一杯やっていることは？」と聞くと、今回の協力者が女性に偏っていたこともあるだろうが、ほとんどが「家事の手伝い」と答えていた。毎日ハードな勉強をし、沢山のテストを受け、家に帰ると夕飯作りや洗濯などの家事に追われるという生活が見えた。ダリットという出自が彼女らに与えるハードルは、何よりもまず「貧しさ」が何えた。彼女らはダリットの生まれであっても、健康な身体と忍耐力があればそれに負けずに勉強を続け、好成績を維持し、社会へのステップアップにすることができるようだ。しかしこのような生活は誰しにもできる訳ではないだろう。今後はダリットと教育の関係について、ダリット以外からも聞き取り等の調査を行い、インド社会での教育と出自の関係について研究したい。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

上月理愛「ケララ州のダリット村におけるオーナム祭の催事について」『RUGAS』33巻、2016、pp. 42-50
夏期調査の際に観察した、ケララ州の州祭であるオーナム祭でのダリット集落の様子について、立教大学の地理・人類学研究室機関誌「RUGAS」で発表した。